

歴史的なまちなみを生かした地域の活性化について

~南区の白根商店街を対象として~

1. 対象地の選定理由

研究を行う対象地は、一般の方に認識されていない歴史的資源が眠っている地区であること、歴史的な資源を活かした活動がまだ行われておらず本研究が活動のきっかけになること、また、地元への愛着が強い地区であることを選定の視点として考えた。そこで、新潟大学の調査・研究で多くの歴史的建造物が残ると評価されており、大風合戦によって地元への愛着が非常に強い、南区の白根商店街を対象として、研究することにした。

2. 白根商店街の概要

今回の研究対象地である白根商店街は、南区の中心部にある南区役所から徒歩10分、大風合戦の会場でもある中ノ口川に沿って軒を連ねており、周囲には今も町屋が数多く残されている。

昭和6年の白根大火の際には多くの建物が焼失したものの、その後再建され、歴史的な町並みが残る町となった。

白根商店街には道路幅の異なる2つの通りが存在する。

メインストリートである本町通りは、広い道路を中心に商店街が立ち並び、車の通行も多い。道路幅が広いため、対角線上の街並み全体の連続的賑わいを感じることができ、歴史的な建物を全体的に見るのに適している。

本町通りと平行に走る新町通りは歩行者が優先的に通行できるような道路を中心に商店街が並び、車の通行は少ない。道路が狭いため、両側の街並みが一体となり、商店街の情報が集約されている。

今回の研究では、白根商店街のメインストリートである本町通りを主として、デザインガイドラインの検討を行った。

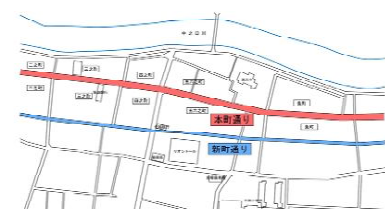
3. 歴史的建造物を活かした地域活性化の取り組みの提案

◎歴史的建造物を活かした地域の活性化に向けて

わが国では、少子高齢化、人口減少、モータリゼーションなど社会を取り巻く環境の大きな変化により、中心市街地は衰退しつつあり、その活性化が求められている。この中心市街地には、今回のテーマでもある歴史的建造物をはじめ、その長い歴史を背景とした、地域独自の資源があるが、そういった地域独自の資源は時によって、地元住民が認識していない場合がある。

そのような、地域住民を含めて一般に認識されていない、埋もれている地域資源を再発見し、その上でそれらの活用することで、地域の活性化にもなり、地域資源の保全につながるのではないかと考えた。

そこで、地域資源である歴史的建造物への地域住民の価値の再認識に向けた取り組みを提案するとともに、その活用案や町並み保全のデザインガイドラインについて提案を行う。



◎歴史的建造物の価値認識と活用に向けた取り組み

地元の住民などは、自分たちの暮らす町が価値のある歴史的な町並みであることを理解していない場合がほとんどであると考えられる。白根商店街も、実際にそのような状況であることから、歴史的建造物の価値再認識に向けて、住民などが取り組むべきことをまとめた。

①まず取り組むべきこと（望まれること）

地元住民等は、自分たちの暮らす町が、価値のある町並みであることを知らない。

→価値のある町並みである事を認識してもらう

→価値ある町並みであることを住民に対し啓発する必要がある

※取り組み主体として、大学・任意団体など

②その次にやるべきこと（活動初期）

価値ある町並みであることの「再発見」

→町並みを切り口に、地域の活性化に向けた様々な取り組みを実施していく組織（地元組織）を結成

※一般的には自治会、商店街の方など既成の組織のキーパーソンを

中心に構成し、専門家なども含める

③活動活性化期

町並みを活かした様々な活動へ展開

・町並みを活かした催しの実施

・歴史的建造物の活用（団体の活動拠点として運営）

・町並み保全のためのルールの制定（協定など）

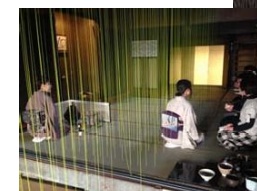
・各種制度（補助事業）等を利用した町並み整備

・空き町屋の借り手と所有者のマッチング など

→歴史的な町並みを価値あるものとして、

生活の基盤（中心）に取り戻し、地域の活性化を図る

まち歩きの様子→



←水と土の芸術祭の期間中に行われたお茶会の様子

◎地域活性化に向けた歴史的建造物の活用案

○耐震性について

町屋の構造上の問題点（白根の町屋は明治～昭和初期の建築）

間口が全面開口 →壁量が不足

通り側は2階建て →重心のアンバランス

長屋形式で奥行寸法が長い →水平構面の強度不足

1階の間口は出入りのため全面開口となっており、耐力壁が無いという構造上の弱点を抱えているため、1階部分が崩壊する可能性がある。使用性や景観を損なわずに補強するため、近年、伝統工法を対象にした、限界耐力計算法という従来の精密診断に代わる新しい耐震診断の手法が出てきている。

○白根地区町屋モデルへの適用例

右図の青いラインが既存の壁を示しているが、1階の梁間方向にはほとんど壁がない。赤い点線で示す箇所には、閉塞感が少なく視線や風が通り、大きな変形まで耐えられる面格子を配置している。

1間を1ユニットとして、仕切り方にはいくつかのパターンが考えられる。蔵は面格子でなく、荒壁や土壁を採用するなど、適材適所で組みあわせを考え、正面側と後ろ側をそれぞれ補強することで、水平構面の問題も解決出来る。

